その十五　美英子抄

「摩周湖が晴れました。出発！」

いい加減な天気予報に担がれて上町（ウエマチ）さん、下村（シモムラ）さんのウチら三人は摩周湖行の観光路線バスに乗る。庶民が摩周湖に行くにはこれしかあれへん。二人は中学からの親友やから一緒に座る。その後ろに同（オナ）い年ぐらいの女子の横が空いてたので同席させてもらった。

スラッとしたいかにも才女という感じで一人旅と言うだけあって暗い。お互い大阪出身と分かっても会話は進まない。喋り好きのウチはおもしろないから勝手に想像する。

――失恋した心を癒（イヤ）すために摩周湖に来たんや。ウチも大恋愛して、大失恋して、失意の旅に出たい！

名乗ることはなかったけど真っ赤なリュックの名札に「中原夏子（ナカハラナツコ）」と書いてあった。なぜか緊張感満載の空気が伝わってくる。

第一展望台の駐車場に到着すると一緒に降りる。

「帰りも同席していいですか？」

けど大人の返事。

「そうなればいいですね」

モデルのような後ろ姿に溜息を漏らす。
――ウチもスレンダーやけど十センチ足らん！
彼女の容姿が頭にたたき込まれた。この間に周りの状況が一変して天気予報を裏切る霧が発生。近くにいるはずの上町さんらがいない。仕方ないから赤いリュックを追いかける。
その夏子さんは霧の中でも一目で男前と分かる――この少し後で出会う守君（モリ）と顔を突き合わせていた。当然この男子はバスには乗ってなかった。
――摩周湖でデート？
お似合いのカップルやと思ったのは一瞬。まるで喧嘩しているような雰囲気。もちろん霧に紛れて近づく。
――これが不思議な物語の始まり！
霧に関係なく会話はハッキリ聞こえる。
「偶然、会ったことにして……納得させる」
「やっぱり気が進まないわ」
「ここまで来て、今さら」
「あとが怖いわ」
「二世（フタセ）に未練があるのなら、縒（よ）りを戻しても構わない」
「やめて！　そんな言い方」

「何度話し合ったことか。夏子次第。夏子の気持ちを尊重する」
「何度言われても……分かりました」
こんなところでする会話やない。二人が離れるとウチは夏子さんというより赤いリュックを追いかける。絶対、何かが始まる。でも見失う。
――足の長さが違うんや
ますます霧が深まる。広くない展望台なのに人影を見つけては近づくけど知らん人ばかり。何とか下村さんを見つけた。その先で上町さんがさっきの超男前としゃべっている！
――どうなってんの！
ウチに気付いた上町さんが守君を紹介してくれる。横にブ男がいた。ついさっき霧の中で守君と夏子さんの会話に登場した一風変わった姓（二世）の男子や。何とこの二人は親友で一緒に旅行している。
――何が始まるんやろか
改めて二人を見比べる。
――夏子さんがこの男子から守君に鞍替えしたんは当然やなあ
守君、上町さん、下村さんは三人で盛り上がる。ウチも話の輪に入りたかったけどはじかれる。二世君もそうやから簡単にくっ付いた。夏子さん、守君との関連で二世君にも興味津々。けどアホな話をしてるうちに、またしても上町さんらとはぐれてしまう。

――何で！　ほとんど動いてへんのに。

ところがどっこい！　ここで赤いリュックの夏子さんが再登場！　しかも赤いマークが印象的な、いかにも高そうなカメラをマモルに手渡す。当然ウチの視力と聴力がパワーアップする。

「シャッター、押して頂けませんか？」

ウチはアホやけど霧の中でこんなセリフ、絶対言わへん。彼女は理知的に見えるけどアホや。せやからというわけやないけどウチに気付いてうろたえる。

夏子さんと守君（モリ）のターゲットは「二世（フタヒ）」君ことマモル。それにこのふたり、霧隠才蔵みたいに霧の中を自由に移動できるみたい。

「ごめんなさい」

立ち去ろうとする夏子さんをマモルはボーッと見つめたまま。手にはカメラが残っている。

――何してんの！　カメラ、くれるて言うてへんで

マモルからカメラを引ったくって霧に消えかけた赤いリュックを追いかける。

「中原さん！　忘れ物！」

名指しされて振り向く彼女にカメラを押しつけると赤いリュックが霧の中へ消えていく。

――マモル、夏子さん、守君（モリ）。この三人には想像を絶する深い因縁がある！

後で考えたらマモルがあのままカメラを持っていた方が面白いことになっていたかもしれん。

さてマモルとウチが一緒にいたことは、夏子さんにとって、結果的には守君にとっても想定外。想定外が起こると仕組まれた計画が壊れてしまう。上町さんと下村さんが偶然守君と遭遇が大本やけど、強烈な想定外を上積みしたのはウチや。俄然興味が湧く。

夏子さんは大阪からほど遠い摩周湖で偶然マモルに会ったことにして、別れざるを得なかった言い訳や守君との付き合いを説明して霧に流す……違う、水に流す段取りやったはず。

決して広くない摩周湖第一展望台で、しかもほんのわずかな間に後々問題になる偶然が集中した。

守君とマモルのこと知りたくなるの当然。マモルの誘いに乗じてみんなで知床に向かうことになった。天然温泉風呂も面白かったけどテント事件がウチの運命を変えた。

守君が風邪を引いたのでマモルの寝袋でテントの奥で、上町さんと下村さんが守君の二人用の寝袋でテントの入口で一緒に寝る事になった。この二つの寝袋の間でウチとマモルは着れるモンを全部着てウチが奥、マモルが入口側で一枚の毛布を分け合っていたけどそのうち独占した。だから寒くはなかったけど二人の男子に囲まれている。なかなか寝付けなかった。

それはさておき、守君が何故二人用の寝袋を用意してたんか。それは夏子さんと二人で寝るため。ウチのシナリオはこう。

段取りがうまくいったら守君と夏子さんはマモルを観光路線バスに押し込み「バイバイ」して二人で北海道旅行を楽しむつもりやった！

――これって滅茶苦茶残酷なシナリオや。
我ながらマモルを可哀想に思った。せやからウチはマモルに抱かれた？　せやない！　心じゃなく身体を温めてやるために暖房器代わりに抱かれてやっただけ……なんやけど不覚にも深みにはまった。

＊

もっと早くマモルや守（モリ）君と会えると思っていたけど意外と間隔が空いた。それは秘密を知った以上、二人だけで会うのが怖かったから。一方ではウチの興味は衰える事はなかった。だから、受付のアルバイトにはすぐ飛びついた。
神戸学生会館での出来事は強烈やった。
ところでバスで一緒だったけどウチの顔は夏子さんの記憶には残らなかった。何故なら神戸のコンサートの受付で、夏子さんは関係者だけに配られる楽屋にも出入りできる特別チケットを提示したけど、ウチにはまったく気付かなかった。と言うことは守（モリ）君もウチを余り注視してなかった。
ウチはモダンバレーで舞台経験あるから楽屋の役割を知ってるけど、関西屈指の大舞台を誇る神戸学生会館のそれは立派。楽屋は舞台裏で打ち合わせや本番の準備をする場所やから、トイレとかは別にして機密性はないし視線を遮るけれど声は丸聞こえ。銭湯に似ている。
「おーい。行くぞ」

「メイク中」
「急げ！　本番が始まる」
「ごめん。トイレだけは行かせて」
「俺も行く」
　こんな具合で話は丸聞こえ。
　さて役者は三人。後半のコンサートの主役守(モリ)君。特別チケットで入館した夏子さん。まだ現れないけどマモル。撮影のために必ず現れる。当然スパイ活動のチャンスを窺う。
　正面玄関のドアが開けっぱなしの受付は寒くて冷える。我慢できずに楽屋のトイレに駆け込む。気持ちよく用を足していると何処からか夏子さんと守(モリ)君の会話が聞こえてきた。ふたりの声を知ってるし陰謀も熟知している。
　小声や涙声もあって摩周湖と違ってハッキリすべての会話を聞けなかったけど結構長かった。
「何を躊躇する？　後戻りしたいのか」
「そんなの、できるわけ、ないでしょ」
「分かった。要は摩周湖のようなやり方じゃなく、単刀直入に一、二分で切り上げるんだ」
「後が……可哀想……いえ怖い」
「何回言ったら気が済むんだ？　任せると納得したじゃないか」

抵抗する割には夏子さんは素直に「はい」返事する。
「もう一度確認する。二世(フタセ)は本番前に必ず照明室でスタッフと打ち合わせする」
「本当に照明室は真っ暗なの？」
「いい加減にしてくれ」
「ごめんなさい」
「午前と午後の部の間の十数分しかチャンスはない。打ち合わせが済んでスタッフが昼食休憩に出かけたときがチャンス。一人になれば気が緩む。もう何度も説明した」
夏子さんは頷いているはず。緊張感が伝わってくる。
「いいか？　縒(ヨ)りを戻すような雰囲気で距離を詰めて説得する」
「自信ないわ」
「自信の問題じゃない。本心だ。前から言っているように本当に縒りを戻す気持ちになってもいい。その後は結果次第」
「だから踏み切れないの」
会話が途切れる。息づかいが聞こえた後、夏子さんが続ける。
「疑ってるの？　言われたとおり、中絶したでしょ」
――中絶！
夏子さんはマモルの子を身籠もっていた。ウチは大ショックを受ける。

「縒りを戻すなんてあり得ないし、堕ろした私を許すはずないわ」
「許して欲しいのか」
――えーっ！　何てことを言うの！　それこそ許されへん
夏子さんは黙ったまま。
「二世は妊娠した事は知らない」
「……こんなところで言うのも……」
夏子さんは一旦言葉を切るが、すぐ意を決したように少し力を込めて続ける。
「親友を失うのよ。平気でいられるの？」
ウチが聞いた範囲内では恐らく初めて夏子さんが急所を突いた。すぐさま守(モリ)君が応える。
「分かりきった事じゃないか。ここでそんな事を切り出すなんて」
沈黙が始まる。少し間を置いて守(モリ)君が補強する。
「当然親友を失いたくはない。でも夏子を選んだ。それがすべて」
夏子さんは黙ったまま。
「後は夏子次第」
せめてもの抵抗か。夏子さんが言葉を置く。
「押しつけないで」

「押しつける？　夏子の気持ちを一番に考えているだけ」
「いつも押しつけてばかりだわ。それに縒りを戻すわけないのに、なぜ身を引くって言うの。本当は……」
一旦止めるけど反応がないので夏子さんは強く言葉を繰り出す。
「アナタこそ、春夜さんと縒りを……」
パシッと言う音がする。守君が夏子さんを叩いたに違いない。再び沈黙が続く。その後夏子さんの押し殺すような嗚咽が聞こえてきた。
――春夜？　プログラムに載ってた守バンドのバイオリニスト、南野春夜のこと？　守君とどんな関係がある女子なんやろ？
モダンバレーで鍛えたとはいえ足のしびれが限界に達する。やっと二人の気配が消えた。
――助かった
でも「中絶」、「春夜」という二つの言葉が頭の中で何度も響く。
夏子さんがマモルに縒りを守君と結婚してもいいと思った事もあったけど、これはミーハーだったころのウチの感覚。ましてや中絶して縒り戻すなんてあり得ない。守君は自分を女子の心、知り尽くしているプレーボーイと思ってるんやったらアホや。常識的に考えてもマモルに夏子さんを返品というわけにいかんやろ。
ウチは守（モリ）君に興醒めした。夏子さんより春夜さんに興味を覚える。それに、守君と夏

子さん、演奏もやけど、本当に結婚するんやろか。二人の会話に愛情はない。
「よいこらっしょ」と立ち上がって水を流す。そしてしびれた足を引きずりながらトイレを出て受付に戻る。しばらくするとマモルがニヤニヤしながら受付に現れた。
――何してたん！　遅刻やんか
夏子さんと守(モリ)君の陰謀をマモルに暴露するかどうか悩む。「中絶」と言う言葉に引っかかる。
――マモルはどう反応するんやろか。思い切って言った方が……
割り切ろうと思うけどできない。食堂でおにぎりとお茶を買って照明室のマモルに差し入れた。
「もうすぐ夏子さんが現れる」と、喉元まで出るけど言えなかった。
ウチと同じように躊躇したんやろか、夏子さんが照明室に入るタイミングが遅すぎた。舞台と同じで本番になると身体が震える。夏子さんの気持ちはよく分かる。
照明室に入って一分も経たずに照明スタッフが戻ってきた。すぐ夏子さんがすぐ出てきて走り去った。追うようにマモルも出てきてしきりに左右を確認する。
――またもや夏子さんは失敗した
コンサートが始まる。ウチはマモルがカメラを構えるすぐ後ろで守バンドの演奏を聴く。ピアノを弾く守(モリ)君と春夜さんのバイオリンに注目した。二人とも動ずることなく演奏する。春夜さんのバイオリンが守(モリ)君のピアノにぴったり絡みついて聴衆を魅了して公演が終わった。

パンフレットのクレジットによると春夜さんは若手女性バイオリニストとして将来を嘱望されていた。まさしくそのとおりで過大評価やない。その実力を目の当たりにしてなんとも言えない気持ちを衝撃に変更した。

コンサートが終わるとマモルが撮影した守（モリ）バンドの写真集が売れに売れた。春夜さん、守（モリ）君、そしてマモルにしても、高度な特技を持っている。自分が情けなくなった。

とにかくマモルをべた褒めしたかったのに何処を探してもいない。

――ウチから逃げるため？

言いたい愚痴（グチ）、山ほどあるはずやのに。何で？　優しく接したのに。

ここで受付に現れたマモルの表情を思い出す。驚くほど明るくさわやかだったけどウチに気付いてすぐ表情を引き絞めた！　そして視線を避けた。

――ひょっとしてウチ以外に女を作った？

ウチの厳しい直感が……と言うより自分で言うのもなんやけど、ドラマ通のウチの直感は鋭い。別に餅を焼くつもりはないけど、ああ見えても夏子さんを仕留めた実績がある。意外とやり手なんかもしれん。

――油断したらあかん。でもエエなあ。男子は顔、関係ないもんなあ

写真集を売りながら春夜さんのことが気になって仕方なかった。

――何故、守（モリ）君は春夜さんより夏子さんを選んだ？

受付の喧噪が消えた時、守（モリ）バンドのドラマーがふらっと現れたので、マモルに訊こうとした春夜さんと守（モリ）君の関係を尋ねてみた。

「春夜は守（モリ）の許嫁（イイナズケ）。いずれ結婚するやろな」

驚くというよりは無力感に陥る。スタイルがいいとか一芸に秀でても女子は男子に翻弄される。ましてウチなんか何の取り柄もあらへん。

「事実は小説より奇なり」

摩周湖で始まったこの物語の結末はどうなるん。傍観者でエエけど、このドラマの最終回は絶対見たい。ハッピーエンドはあり得へん。悲劇か、喜劇か、それを知りたい。

――百パーセント悲劇や！

＊

マモルＶＳ守（モリ）、マモルＶＳ夏子、春夜ＶＳ夏子という三つのＶＳ問題がいつどのように発生して複雑に絡まったのか、知らんけど、この四角関係を探るために、悩みに悩んでマモルのデートの誘いを受ける。

――マモルの懐に飛び込まんと情報は手に入いらへん。

少なくても失恋から逃避するためにウチと付き合ってるかだけは確認したかった。春夜さんの動向も気になるけどよくよく考えれば直接ウチに影響はない。それでなくても複雑なのでＶＳの数を減らしたかった。

恋人になりきって根掘り葉掘り守君（モリ）と夏子さんの関係を聞き出すために、思い切ったサービスを考えた。まず、高級料亭の弁当を取り寄せて敢えて粗末な弁当箱に詰め替えてウチが作ったように見せかけた。食べ物で釣る作戦や。いい線までいったけど……逃げられた。ちょっと甘くすれば男子は簡単に騙されると思ってたけど、ブスのウチには無理やった。

仕方なく一つのカップでフーフーと熱いお茶を一緒に飲む柔らかめの作戦に変更したけど、やんわりと断られた。

今度は寝たふりして作戦を練り直す。過激な誘惑をしたけど乗ってこない。次に家まで送ってくれるんやから、お母さんにマモルを紹介して追い詰める作戦を考えた。けど家の前に着くとあっさりと「じゃあ」と言って帰ってしまった。

結局、このデートでウチは大損失を被（コウム）った。お母さんからも「一万円もする料理をなんで注文したんや」と怒られた。お金より心に受けた傷が大きかった。

――ウチを好きなんは間違いないんやけど。やっぱり夏子さんを忘れられへんのやろなあ

この作戦の失敗原因はハッキリしている。ウチが美人やったら簡単にキスした筈や。ここは原点に立ち返って考えなければ。アホな頭で分析した。努力の甲斐あってついに原因を究明した。それはこれまでの人生で最大の発見やった。

――これまでの付き合い方が問題やったんや！

追いかけると逃げる。逃げると追いかけてくる。こんなパターン、ドラマで何度も見たのに

ぜんぜん気付けへんがった。ウチは興味津々の割には追いかけなかった。そしてさらに気が付く。

――ウチの奥ゆかしい性格が問題やったんや！

けど今さら素直な性格を修正するなんて、できるわけない。

ここまでマモルのことを、と言うより過去なり現実を知ってしまうと愛着を感じる。でも強気の作戦はことごとく失敗した。

一方、厳しい現実が迫ってくる。ウチはまもなく女子ではなくオバはんになる。「大阪のお姉ちゃん」やなく「大阪のオバはん」という汚名を着せられる事になる。ここはなんとかポジティブに考える。

――今日が一番若いんや。勝負や！

と思ったけど

――単なる興味本位と違うん？

目的が分からんようになって混乱する。芸能人のスクープ番組の見過ぎかもしれん。でもテレビを見るよりおもしろなってきた。

＊

ウチとマモルが気が合うことは否定せーへん。だから守君（モリ）は上町さんを通じて仕掛けて来た……テレビを見んと自分の頭で考えた。

守君のお父さんの体調が、夏子さんとの結婚をこれ以上先送りできなくなったのかも知れへん。でも本当に愛し合っているのなら、マモルのことなんか気にせずにさっさと結婚すればいいだけの話。そうも行かないところが問題。

――こっちも大迷惑してるんや。何とかしろ！

守君がどこまでウチの想いを知っているのか分かれへんけど、黒馬の別荘は信州ではなく関ヶ原。同じ女性でも裏切られる事があるから用心せんとあかんけど、つまり、上町さんが味方になってくれるのか守君の手先なるのか、気になったけど誘いに乗った。それに三度目の正直になる夏子さんもどこかで現れるはずと踏んだ。小さな胸をわくわくさせながら黒馬に乗り込んだ。

ウチは守君の期待に応えるのではなく素直にマモルに接した。マモルがどう思おうと恋人のように振る舞った。そう、守君や上町さんは第三者やないけど、二人の前でウチがいかにマモルを愛しているかと言う動かぬ証拠を創ろうとした。

でもマモルは意固地なまでガードを下げへん。ウチの気力が段々と低下する。何となくこの不思議な物語に飽きて来たんかも。マモルが差し伸べてくれた手にも気付かないほどボーッとして黒馬大池の淵を歩いていると大事件が起こった。足を踏み外して……「キャアー」

何と想定外の大事件がウチに降りかかった！　ドラマの主役が視聴者の命を救うという前代未聞の事件が起きた。

気がつけばウチは一気に「マモル」ファン倶楽部の会長に上り詰めた。会員はいない。
でも大問題が立ちはだかる。始めはマモルVS守（モリ）、マモルVS夏子問題なんかどうでもエエと思っていた。
一方、それまで心底マモルを愛していると自覚していなかった自分に驚いたけど、少なくともテント事件からマモルのことを気に掛けてきた。確かに興味本位やったけど決してキライやなかった。マモルのウチに対する気持ちを守（モリ）君から聞いた上町さんから教えてもらったけど、このVS問題は避けられない大問題やと自覚した。
二つのVS問題のうちマモルVS守（モリ）問題の方がマモルに与える影響は大きい。だから守（モリ）君は夏子さんに説得係を押しつけた。
――守（モリ）君は卑怯や！
それにマモルVS夏子問題が絡むとしんどい。夏子さんに代わってマモルを支えたいと思っても格が違う。柔道なら夏子さんは黒帯でウチは白帯。相撲なら夏子さんは横綱やけどウチは幕下。もうちょっとマシな例え方をしたいけど思いつけへん。
――苦しい戦いや
さらに守（モリ）君との友情の決裂はウチの守備範囲外。キャッチャーのウチがセンターフライを捕れるわけない。
ウチには二人の友情の中身の情報がない。付き合いが長いと言う事は歴史的な重みがある。

マモルにはそれなりの魅力がある。砂と塩をわしづかみにして一粒も漏らさない奇妙な魔法を……要はどんな事にぶち当たっても何とかする。夏子さんがそこに魅力を感じて恋に落ちたのなら、ウチは二番煎じでいい。

急に意地を覚える。上町さんを無視してしがみついてでもマモルと大阪へ帰りたかった。「元気、元気」と、明るく見せかけたけど身体が言う事を聞けへん。手を伸ばす事もでけへん。

マモルはすべてを捨て去るというヤケクソ旅行に出かけた。守君（モリ）、夏子さん、そしてウチもいない暗黒の世界へ。

二時間も六甲駅で待ったけど来なかった。次の日も。その次に日も。

――この不思議な物語はこれで終わり？

ウチはこの物語を六十パーセントぐらいのハッピーエンドにしたい。「優」や「良」はいらん。大学でいう単位をギリチョイの「可」でエエ。恋愛に満点はない。恋愛大学を卒業さえできればエエ。諦めへん！　何とかせんと。

――大学に行かなければ。六甲駅で待つなんて甘かった！